

検討総個体数.....	455 点
内 訳	
主に Diffractic acid を含むもの.....	355 点 (78%)
主に Barbatic acid を含むもの	38 点 (8%)
Barbatic acid 及び Diffractic acid を含むもの	26 点 (6%)
Barbatic acid 及び針状晶を含むもの.....	13 点 (3%)
Diffractic acid 及び針状晶を含むもの	19 点 (4%)
針状晶のみを含むもの	4 点 (1%)

○コウヤマキ型分布の化石例 (前川文夫) Fumio MAEKAWA: *Disanthus* as a paleontological verification for *Sciadopitys*-type distribution.

私は本誌 32: 65 (1957) でコウヤマキの異様な不連続分布を地史的なまた種分化的な過程の一断面として見るべきことを述べ、磐城山地における現在のコウヤマキの如き小地域の残存は失われ易いからそれから変成した例は他の属種に期待できる事も併せてのべた、それと判定しうる例がもうみつかったので次にのべる。それはマルバノキ (*Disanthus cercidifolius* Maxim.) であつて、これの葉が磐城山地の東南足に拡がる会津亜炭田の藤糸層(上部中新世~下部鮮新世)から発見された。場所は福島県耶麻郡山都町白小沢で、報告者は福島大学の鈴木敬治氏(日本古生物学会紀事 N. S. No. 29: 168-171. pl. 25 (1958))である。ただ同氏はこの葉を、欧、亜、米に分散孤立したマメ科のハナズオウ属と考え *Cercis Endoi* Suzuki とされたが、図版の写真をよくみると、中脈の上半に不規則な蛇行がみられること、葉縁に不明瞭なうねりがあること、主要五脈の左右最外見脈の脚が直角より明かにせまいことなどは *Cercis* にあてるよりも *Disanthus* に当てべきであることを示していると判断する。この同定に従えば、マルバノキは私の上記報文中に記した D 型に現在なっているが(同種は木曾谷から西、山陽及四国にわたつて分布する)、少くとも鮮新世初期には G 型であつたことがわかり、磐城山地の種分化的意義をさぐる上に新しい手掛りとなるといえよう。

Fossil leaves of *Disanthus*, Hamamelidaceous monotypic genus from western Japan was newly found from lignite bed in Fukushima Pref., northern Japan. The strata belongs to Upper Miocene or to lowest Pliocene. Therefore it may be suspected that the genus had, at least in Miocene, the same pattern of distribution with that of recent *Sciadopitys*.